

〔公開シンポジウム「日本文学における死と救済―怪異の視点から―〕

## 源氏物語における死と救済

藤 本 勝 義

**要旨** 源氏物語では重要な人物で死ぬ者が多い。それは、長編物語のためだけでなく、死そのものの意味があり、死で終わるのではなく、そのプロセスと、死後に残された者の思いが重視されているからと言える。本稿では、死のもたらずものと、死者の救済について考察し、仏教的な救済はもとより、源氏物語独自の救済の論理を把握しようとするものである。まず、物の怪に憑依された人物を取り上げる。夕顔は、その死が娘などには知られないため、菩提を弔われることが少なく、成仏することがかなり遅れた。葵の上は、嘆き悲しむ光源氏の心からの哀悼により成仏したと考えてよい。しかし、光源氏がそこまで葬の上を愛していたとも思われな。別の理由も考えられる。死者の往生のためには、生前の本人の仏道への帰依と、残された者の供養が要請された。勤行の経験がほとんどなかった主に若い死者には、残された者の心からの追善供養が必要である。六条御息所を光源氏が、心をこめて菩提を弔うことはなかったと言つてよい。それは、死霊となる六条御息所の物語とも深く結びついていた。源氏物語では、死者の冥福に関して、追善供養と精神的救済が要請されているかのようである。紫の上は厚い信仰心と光源氏の心底からの供養によって極楽往生した。次に、亡霊として夢枕に立つ人物の救済だが、桐壺院は、光源氏による大々的な追善供養によって救われ、極楽往生したと考えられる。藤壺救済の道筋は、身代わりになってでも救いたいという光源氏の強い思いなどで、はっきりとつけら

れた。八の宮は、中の君が「幸い人」路線を進むことで、心の平安を得て成仏したと考えられる。源氏物語以外の作品では、光源氏など個人が、心の底から菩提を弔うといった、あくまで物語の精緻な展開に密着した描写は限られており、盛大な葬儀を行うことが、当事者の権勢を示すことに直接関わったり、源氏物語には決して描かれなかった挿話を記すなど、その質の違いが際立つのである。

キーワード…霊に憑かれた者、夢枕に立つ死者、極楽往生

## はじめに

源氏物語には死ぬ者が多い。桐壺更衣、夕顔、葵の上、桐壺院、六条御息所、藤壺、柏木、紫の上、さらには八の宮、大君など重要な人物が死んでいく。平安時代の他の作品では、『栄花物語』を除くと描かれ方が少ない。『栄花物語』は、歴史物語としての性格上、多いのは当然であろう。源氏物語に多くの人の死が描かれるのは、長編物語ゆえではあるが、無論、それよりもっと重要な意味があるろう。死そのものの意味があるわけで、多く、死で終わるのではなく、そのプロセスと、死後に残された者の思いが重視されている。本稿では、死のもたらすものと、死者の救済について考察し、仏教的な救済はもとより、源氏物語独自の救済の論理を把握しようとするものである。

## I 物の怪に憑依された人物

### 一 夕顔の死

夕顔は、光源氏の密かな恋愛沙汰の果てに、何某の院にて物の怪に取り殺された。四十九日の法事を営んだ翌夜、光源氏の夢に、何某の院で枕元に座っていた女の姿が、そのままの様子で現れた。夕顔が行方知れずになり、夕顔の乳母は仕方なしに、四歳の玉鬘を連れて筑紫へ下向した。筑紫へ着いた後の乳母の夢は、次のように語られ

た。

夢などに、いとたまさかに見えたまふ時などもあり。同じさまなる女など添ひたまうて見たまへば、なごり心地あしく、なやみなどしければ、なほ世に亡くなりたまひにけるなめり、と思ひなるもいみじくのみなむ。

〔新編日本古典文学全集本『源氏物語』「玉鬘」巻九〇頁〕

夕顔の死に関して何も知らない乳母の夢に、夕顔とともに、光源氏の夢に現れた女が添って見えるとするのは、語り手が読者を強く意識し、夕顔急死の場面を想起させようとしているとされる（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』玉鬘三七頁）。乳母が思ったのは、夢の女が魔性のものゆえと考えられよう。これは筑紫に着いた後の夢のため、夕顔の死から少なくとも二年前後は経っている。悪夢ということもあり、いまだに夕顔は成仏していないことがはっきりしている。しかし、死を知らされていない乳母一家は、夕顔の追善供養を営むわけにもいかないのである。

光源氏は夕顔の死後一か月以上病に伏していたので、菩提を弔ったのは四十九日の法要で、それも世間体などを考え、名前を示さずに行っている。その後、供養を行ったとしても細々とであろう。玉鬘や乳母一家が夕顔の死を知るのは、筑紫から上京した後なので、その間、玉鬘らは追善供養を行ってはいない。光源氏は、短期間ではあつたが溺愛した愛人の死ゆえ、心をこめて菩提を弔ったと考えられるが、夕顔がいつの時点で往生したかは示されていない。それは、仮にいつまでも成仏できなかったにせよ、物語はそのこと自体を重視していないためであろう。夕顔が往生できず恨み言を言ったり、物の怪となったりする物語展開は意味がなく、全く考えられていないということでもあろう。

## 二 葵の上の死と救済

葵の上は六条御息所の生霊によって取り殺されたが、光源氏の心からの哀悼により成仏したと考えてよい。

経忍びやかに読みたまひつつ、「法界三昧普賢大士」とうちのたまへる、行ひ馴れたる法師よりはけなり。

〔葵〕四九頁

低い声で経文を読みながら「法界三昧……」と唱える光源氏の姿は、勤行慣れしている僧侶より優れていると称賛されている。誠意をもって葵の上の追善供養をする姿勢が明らかである。また、

大将の君は、二条院にだに、あからさまにも渡りたまはず、あはれに心深く思ひ嘆きて、行ひをまめにしたまひつつ明かし暮らしたまふ。

（五〇頁）

とあり、二条院の紫の上のもとへさえ、ほんの少しも帰らず、しみじみ心の底から嘆き、仏前のお勤めに専心して日々を過ごしている。さらに次のような和歌を詠んでいる。

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ

（六五頁）

亡き葵の上に直接語りかけるような歌であり、しかも他人の目を予想しない歌反故ゆえ、光源氏の悲痛な心情を

表現している。こうした光源氏の沈痛な長々しい追悼場面が続く。まさに愛妻の死を心から悼む風情である。しかし何か釈然としない。それほど葵の上を愛していたとは思われないからである。あたかも、生前の葵の上への不実を相殺するかのような感じもする。もつとも、権勢家としての道を歩む源氏が、結婚後、多数の女と関わり合ってきたも、一人の子もなしていない中で（不義の子・冷泉院は除く）、初めて跡継ぎの子を生み、しかも出産直後に死去した正妻をいとしく思うのは不自然ではない。

しかし、取ってつけたような印象も受ける。光源氏が菩提を弔うことにより、葵の上の極楽往生が図られるわけで、どうも、葵の上の往生自体が何よりも重視されたと思われるのである。死者の往生のためには、生前の本人の仏道への帰依と、残された者の供養が要請された。勤行の経験がほとんどなかった主に若い死者には、残された者の心からの追善供養が必要である。葵の上の場合、残された両親は当然だが、光源氏自身の姿勢が重要であった。後に触れる六条御息所を、光源氏が、心をこめて菩提を弔うことはなかったと言っつよい。無論それは、死霊となる六条御息所の物語と深く結びついているのだが。葵の上の成仏は一つに、紫の上が光源氏と結ばれ、正妻への道を進む物語と関わっていよう。葵の上は、冥界に彷徨ってはならなかったということでもあろう。源氏物語では、死者の冥福に関して、追善供養と精神的救済が要請されているかのようなのである。

### 三 紫の上の死と救済

紫の上は、六条御息所の死霊によって仮死状態になったが、源氏の懸命な看護により蘇生した。出家の望みを持ち続けるが、決して源氏に許可されなかった。そのため、紫の上は在俗のまま、仏道に厚く帰依し続ける。

年ごろ、私の御願にて書かせたてまつりたまひける法華経千部、急ぎて供養じたまふ。わが御殿と思す二条院

にてぞしたまひける。……仏の道にさへ通ひたまひける御心のほどなどを、院はいと限りなしと見たてまつり  
たまひて、……  
〔御法〕四九五頁

死期の近づいた紫の上は、自身の発願として書かせた法華經千部を、二条院で供養する。仏道の儀式に深く通じている紫の上に、光源氏は感服している。紫の上は仏道に帰依し、かつ現世に執着することなしに、比較的静かに死を迎えた。しかし、源氏の悲嘆は際立ち、七日七日の法要も取り仕切れず、夕霧が万事世話をしているほどである。「幻」巻では、季節の推移に従い、庭前の植物等に則して紫の上の思い出に耽り、虚け者のような日々を送る。追善供養としては、一周忌に、紫の上が作らせておいた極楽の曼荼羅（浄土変相図）などの供養をさせる記事がある程度で、あとは専ら悲嘆に沈み、追憶する描写ばかりである。

妻の死の服喪は三か月だが、源氏は紫の上死後、実に一年教か月も実質的に喪に服した。その間、公的な場へは一切顔を出していない。紫の上は厚い信仰と源氏の供養によって極楽往生した。二度と誰かの夢枕に立つことはない。まさに、心から死者を悼み追想する精神が、死者を救済した体である。

#### 四 女三の宮の出家

女三の宮は、六条御息所の死霊によって出家を促され、父朱雀院に懇願し尼となる。しかし、御息所の憑霊とは別に、不義の子を抱こうとしない光源氏との、今後の生活に絶望した女三の宮の、追い詰められた精神が重要である。憑霊によるだけなら、出家後に現世への未練が生じてもおかしくはない。しかし、女三の宮の出家生活はほぼ安定し、俗世への未練を感じさせるものはない。彼女の不義密通の罪などは、若くして出家し、長い期間の仏道生活によって希薄になり、確実に極楽往生への道を歩み続けるのである。

## 五 浮舟の出家

浮舟は、薫や匂宮との關係を清算すべく、入水しようとして果たせず意識不明となった。横川の僧都に救われ、浮舟に憑依していた法師の死霊が正体を現す。その後、僧都に懇願し出家を果たして救済されたはずだが、生存していることや居所を薫に知られ、安らぎの生活を乱される。浮舟は無論まだ救済されてはいない。何よりも、本人の気持以外の救済を妨げる障害がある。「夢浮橋」巻の後、浮舟の救済はあるのか、極めて覚束ない。横川の僧都から還俗を勧められたと取るならば、なおさらである。ただし、浮舟自身の考えは定まっており、その気持が男君によって惑わされることはほとんどないと思われる。そのような障害さえなければ、浮舟は確実に救済される道を進むに違いない。

## II 亡霊として夢枕に立つ人物と救済

### 一 桐壺院

桐壺院は、須磨謫居中の源氏の夢に現れ、在位中、過失はなかったが、知らぬうちに犯した罪ゆえに成仏できないとする。しかし、物語では光源氏を都へ召還すべく動く。この辺りは、周知のように菅公説話を下敷きにして展開でもあり、桐壺院は息子がかりなだけで夢枕に立ったわけではない。いわゆる「子ゆえの闇」というわけでもない。故院は守護霊として、光源氏を救済する重要な存在であった。光源氏は、須磨流謫前に故院の山稜に拝し、除名処分になった悲運等を切々と訴えるが、その折、生前そのままの故院の姿をはっきりと見た。このことは、後に光源氏と朱雀帝の夢枕に立ち、光源氏を召還へと導く展開と関つていよう。

桐壺院は、復権した源氏による大々的な追善供養としての法華八講などによって、救済され極楽往生したといふべきであろう。これらの供養は当然、光源氏の父院への深い愛と感謝の気持が結びついたものといえよう。

## 二 藤壺

藤壺は、冷泉院の将来を危惧し、密事の露頭を恐れて、桐壺院一周忌後に二十九歳で突然出家する。徳も高かった藤壺だが、「薄雲」巻の三十七歳での崩御後、「朝顔」巻で源氏の夢枕に立ち恨み言を言う。光源氏は、あれほど勤行し徳の高かった藤壺でさえ、不義密通の罪により成仏できないことに、大きな衝撃を受ける。冥界にいる藤壺の罪を自分が身代わりになって受けたいと思う。さらに、阿弥陀仏を心の中で思う観想念仏を行い、藤壺の魂鎮めをする。源氏の罪の意識と自分が身代わりになっても救いたいという強い意識等で、藤壺救済の道筋ははっきりとつけられた。

## 三 柏木

柏木は死後、「横笛」巻で夕霧の夢に現れ、遺愛の笛を伝えたい相手は夕霧とは別人だと告げる。親友である夕霧は、柏木の女三宮への思いと、生まれた不義の子・薫のことを、光源氏（手引きをした小侍従も含め）以外ではただ一人、ほぼ察知していた。柏木が臨終の折、心の執をこの世に留めたため往生できなかったと考え、夕霧は、愛宕の菩提寺で誦経をさせ、柏木が帰依していた寺でも誦経の供養をさせる。左大臣・大宮という両親も当然、嫡男の死を深く悲しみ、心から菩提を弔ったはずである。

将来、「宿木」巻で、笛は柏木の遺志通り、薫に伝えられていたことがわかる。これは柏木の往生を語っていることにもなる。

## 四 八の宮

八の宮は死後、娘を心配する面持ちで中の君の夢に現れる。また、阿闍梨の夢に俗体の姿で現れ、現世に執を残



し往生できないことを伝える。大君は、中の君を結婚させるなど、八の宮の遺言を守らなかった罪業を悲しむことになる。大君は死ぬが、中の君は、内親王を降嫁させ権大納言となった薫のバックアップにより、「幸い人」路線を進み、八の宮の心の執を払拭したといえよう。そのことは、成仏していなかった八の宮を極楽往生させたことになる。その後、誰の夢にも八の宮は現れなかった。無論、夢枕に立つことが全て、あの世で彷徨っているというところではない。『大鏡』伊尹伝での、賀縁阿闍梨や藤原実資の夢に現れた故義孝が、極楽で喜びに溢れていると伝える例などもある。故人の楽しげな姿などは、極楽往生していることを示すのである。しかし、源氏物語にはかような夢見が語られることはない。それは、源氏物語の世界や精神が、そのような方向性を取っていないことも関連しよう。尚、中の君の幸い人としての道筋は、大君の鎮魂にもなったと考えられる。

### Ⅲ 六条御息所と光源氏

生霊・死霊として葵の上・紫の上・女三の宮に憑依した六条御息所は、愛情の乏しかった光源氏の、心の籠らぬ供養では救済されなかった。だからこそ、最後まで物の怪として女君に憑依したのである。彼女の救済は、娘の秋好中宮の献身的な追善供養によってなされた。

御息所はこの世に執を残したが、いわゆる根本煩惱であり、『過去現在因果経』が記す「貪欲」（独占欲の強さ）「瞋恚」（自分の心に逆らうものを怨み怒る心）「愚痴」という三種の煩惱（三毒）を全て具有していた。

一方、光源氏は、絶対者として仏の加護が強く、御息所の霊も近づけなかった。

この人を、深く憎しと思ひきこゆることはなければ、まもり強く、いと御あたり遠き心地してえ近づき参らず、御声をだにほのかになむ聞きはべる。よし、今は、この罪軽むばかりのわざをせさせたまへ。修法、読経との

のしることも、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて、さらに尊きことも聞こえねば、いと悲しくなむ。

〔若菜下〕二二七頁

御息所としては、紫の上より光源氏の方へ憑依したかったが、仏神の加護が強く近づけず、光源氏の声でさえかすかに聞こえる程度であったと言う。光源氏は当然、極楽往生した。死後、誰の夢にも出てこなかった。暗黙の裡に極楽往生が語られている。

次に、平安朝の他の作品での死や救済の問題を取り上げる。

#### IV 源氏物語前後の作品の死と救済

##### 一 『篁物語』—異母妹の恋と死

成立が源氏物語以前かどうか判然としていないが、『篁物語』の記事は死者と救済を考えるのに参考になる。異母兄の小野篁と恋愛状態になり、それを知った母親から仲を裂かれ、部屋に閉じ込められて妹は死ぬ。死んだその日に、異母兄のもとに亡霊として出てきて、悲しみの声をあげる。姿は見えず、手に触れることもできない。

この女を死(く)にける屋を、いとよくはらひて、花・香たきて、遠き所に、火をともしてゐたれば、この魂なん、夜な夜な来て語らひける。三七日は、いとあざやかなり。四七日は、時々見えけり。この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、法花経を書きて、比叡の三昧堂にて、七日のわざしけり。その人、七日はなしはてても、ほのめくこと絶えざりけり。三年すぎては、夢にもたしかに見えざりけり。

（日本古典文学大系本『篁物語』三四～三五頁）

妹の心の執はかなり強かったので、供養を続けても、なかなか成仏することはなかった。しかし、七日七日の法要を続けていくにつれ、その魂は少しずつ消えていく。三年が過ぎ、兄の夢枕に立つこともほとんどなくなった。その後のことは物語に語られていないが、妹はついには極楽往生したと見るべきである。

## 二 『宇津保物語』『落窪物語』の死と救済

源氏物語より前に成立した『宇津保物語』では、「菊の宴」巻で、源実忠があて宮へ懸想し、父から顧みられなくなった真砂君は悲嘆し、父を恋い慕いながら死ぬ。それを知った実忠は悲しむが、あて宮への思いは募るばかりといった、あて宮求婚譚の中の悲劇を叙情的に語る。母は真砂君を哀悼するが、この物語は、死者の救済とは無縁の、様々な求婚譚の中の悲劇的な挿話として位置づけているに過ぎない。

『落窪物語』では、落窪の女君の父・忠頼の葬儀の様子が描かれている。道頼が妻の女君の気持ちに酌んで、四十九日などの法要を精一杯、盛大に催して孝養を尽くした。女君のためもあって、道頼は既に自分の大納言位を忠頼に譲ったり、法華八講や七十賀を行ったりしていた。それに対して、忠頼は大変な謝意を表していた。

○御忌のほどは、誰も誰も、君達、例ならぬ屋の短きに、移りたまひて、寝殿には、大徳達、いと多く籠れり。大将殿おはせぬ日なし。

○はかなくて御四十九日になりぬ。この殿にてなむ、しける。「こたみこそ果てのことなれば」とて、大将殿といかめしうおきてたまひけり。子ども、われもわれもと、ほどほどに従ひて、したまひければ、いと猛にきらきらしき法事になむありける。

(二四八頁)

前者の引用では、服喪期間中、君達は皆、低い家（土殿）に移り、寢殿には高僧たちが多く詰めており、道頼も毎日やってきており、後者は、四十九日の法事を豪勢、華麗に催している。ここまですれば忠頼も極楽往生間違いなしであろうが、物語はそれより、道頼の権勢と、女君のために忠頼への孝養の気持を表すところに焦点が絞られていると言つてよい。

### 三 『栄花物語』の死と救済

平安後期では、作り物語ではないが、『栄花物語』では多くの死が扱われ、それぞれ盛大な葬儀や法事が記されることが多い。巻一「月の宴」で、村上天皇の中宮安子の死に際して葬儀等が盛大に行われる。帝・東宮や子息たちをはじめ上達部・殿上人などが葬儀等に奉仕し、悲しみに沈む様が描かれる。かようなことは、特に藤原氏一族に関しての類型的な記し方である。例えば、巻七「とりべ野」で一条帝の皇后定子が崩御し、帝や一族の悲しみの和歌が詠まれており、人々の悲嘆の様子がわかるが、追善供養により死者を往生させるといった方向性をとることはない。また巻二十六「楚王の夢」でも、東宮敦良妃の嬪子が出産後死ぬが、東宮や両親である道長や倫子、さらには嬪子の乳母などの悲嘆の様子が語られる。あくまで死別の悲劇を綿々と語るという類型がある。巻二十九「たまのかざり」でも道長女の妍子の崩御が記されるが、やはり記述方法は同様である。ただし、物の怪による死ということで、成仏が妨げられているのではないかという危惧から、五七日の法事をしている。もともとその法事などで、誰も彼もが悲しみ、多くの女房たちの哀傷歌が連ねられており、妍子の人柄をそのような形で哀惜している体なのである。

これら『栄花物語』での死に関しては、あくまで、現世での死別を悲しみ、悲嘆の大きさの表現自体が重視されていると言つてもよからう。無論、これほど大々的に葬儀や法事が行われれば、死者の往生は疑いなからうが、視

点はそういうところではなく、死者の人徳を惜しみ、仰々しいほどに悲しむ大勢の人間を出すことで、特に藤原一族のすばらしさを賛美しているかのようなのである。

#### 四 『狭衣物語』の死と救済

平安後期の作り物語では、『狭衣物語』巻三で、狭衣は死んだ飛鳥井の女君の一周忌の法要を行っている。

心ざしのしるしには、何事をかはと、思せば、経、仏の御飾りを、なべてならずせさせたまふ。何事も、まことに日の中に仏にもなるばかりに、思し掟てたり。その日、いたう忍びて、自らおはしぬ。講師は、山の座主なりけり。請僧六十人、七僧なども、並び居たり。(新編日本古典文学全集本『狭衣物語』巻三 一四〇頁)

女君への誠意を示すには、今となつては法事しかないと考え、その日のうちに成仏し、極楽往生できるほどであるように、万事に亘つて、配慮の行き届いた盛大な法事となつていのである。高座に上り經典等を講説する講師に天台座主を招き、七僧は無論、請僧が六十人という、一女君のためのものとしては考えられないほどの質と規模の法事である。例えば、『御堂関白記』によれば、寛弘八年(一〇一一)三月二十七日に行われた、道長の等身阿弥陀仏・同経供養の折は、請僧は五十人に及び、南都北嶺の名僧などが招請されているが、道長ほどの者が主宰する他の法事でも、これほどのものはほとんどないくらいである。飛鳥井の女君の一周忌の法事が、フィクションとはいえ、いかに想像を超えるものであったかが分かる。狭衣にどれほど愛された女君なのかと、周囲の者も噂する記述があるが、当然であろう。要するに、狭衣の亡き女君への愛情の強さを訴える文脈なのである。

このことだけを取れば、光源氏の葵の上や紫の上への追悼に似ているが、前述したように、そこには大々的な法

事よりも、光源氏の悲嘆の姿が綿々と描かれるところに焦点は当てられていた。『狭衣物語』では、この後、如上の盛大な法事に応えるかのように、飛鳥井の女君が狭衣の夢枕に立つ。

やがて端にうち休みて、まどろみたまへるに、ただありしさまにて、かたはらに居て、かく言ふ。

暗きより暗きに惑ふ死出の山とふにぞかかる光をも見る

と言ふさまの、らうたげさもめづらしうて、物言はんと思すに、ふと目覚めて、……

(巻三 一四一〜一四二頁)

女君は、無明の闇に彷徨っていたが、狭衣の手厚い弔いにより、お蔭で成仏できたといって感謝する和歌を詠んでいる。法華経を踏まえた和泉式部の「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」を引いているところである。とともに、周知のように、源氏物語「明石」巻で記される、光源氏の夢枕に故桐壺院が立つ場面を下敷きしている。しかし、源氏物語には、夢の中で、かような成仏の謝意を述べる場面などは全くない。夢枕に立つのは、必ず往生していない者に限られる。物語の質や時代性の違いがあるのだろうが、源氏物語の影響をもろに受けた作品が、源氏には描かれない挿話を考えた一つの結果ではあるう。しかし、源氏物語では、盛大な仏事だけでなくむしろ、誠心誠意、菩提を弔う人間の故人への深い愛情と行動が、死者の鎮魂を促し、極楽往生させるという道筋が引かれていたと言つてよい。『狭衣物語』では、それだけですませず、確かに成仏したことを記述上に刻印している。源氏物語では結果は一切記さず、読者の想像に任せている、というより、当然のこととして記さない、蛇足を省く文学的配慮がされているともいえよう。しかし何よりも、源氏物語の世界が、極楽往生を感謝するといった楽観的で安易な展開を取り込むようなものではないことが、最も重要なだと考えるべきであろう。

## おわりに

源氏物語での死者には、総じて、例えばわが子を思う故に成仏できない（柏木、八の宮）など、現世への心の執が必ずあった。それらは、死者自身が晴らすことはできず、後に残された者が追善供養をするしかなかった。葵の上、桐壺院、藤壺、紫の上は光源氏がする、というように。源氏物語の場合は、仏教的救済と相まって、誠心誠意、追悼をするという、精神的な救済が必要とされたともいえよう。

それが叶わぬ六条御息所の魂は、死後二十年近く闇の世界に漂い、死霊として跳梁した。そのことを知った秋好中宮が母を救うために出家を志し（光源氏に許されなかったが）、母のために専心して菩提を弔うことを通して、御息所は成仏できた。紫の上に憑依したが、その死に際し御息所の死霊の影はなかった。

しかし、源氏物語以外の作品では、光源氏など個人が、心の底から菩提を弔うといった、あくまで物語の精緻な展開に密着した描写は限られていた。『篁物語』では、篁が死んだ恋人である異母妹を悼み、極楽往生できるように供養をし続けることによって、成仏への道を取らせた。死者の冥福を祈り、長い年月菩提を弔い続けているところに、死者の救済を重視している姿勢が感じられる。しかし、物語の眼目は、異母妹が篁を諦めきれず、いつまでも亡霊として出現することの執心の強さにあり、光源氏などとの共通性を強く指摘することはできないのである。『落窪物語』のように、盛大な葬儀を行うことが、当事者の権勢を示すことに直接関わったり、『狭衣物語』のように、過去の愛した女君を偲んで供養を行うが、やはりその盛大さ自体が重視され、また、死者が夢枕に立ち、往生できた礼を述べるといった、源氏物語には決して描かれなかった挿話を記すなど、その質の違いが際立つのである。ジャンルは違うが、『栄花物語』に至っては、人の死を悲嘆する挿話でさえ、道長を中心とする藤原一族を、あくまで絶賛する点に集約されるものとなっていると考えられる。

源氏物語は、外的な栄華や幸福などといった展開には決してならず、一貫して悲劇と隣り合わせの、楽観性が入り込めぬ物語であるところに、その独自性はある。極楽往生がなされても、そのようなことを書き記す物語ではないのである。



## Death and Salvation in the *Tale of Genji*

FUJIMOTO Katsuyoshi

**Abstract** There are many deceased who are important in the Tale of Genji. This is not only due to the length of the work, but also because there is a significance to death itself. Death is not the end of one's life but the process until one dies, and the thoughts of the bereaved are taken seriously. This article discusses what death brought, and how the salvation of the deceased is thought to express the unique logic of Buddhist salvation found in the tale. First of all, the characters possessed by ghosts are introduced. Since the death of Yugao was not informed to her daughter, Yugao did not receive enough prayers for her from the bereaved, and this made her departure in peace so late. It can be considered that Aoinoue passed away with deep sorrow, expressed by Hikarugenji, who grieved over her death. However, it is unlikely that he loved her so much. There must have been another reason. It was necessary to be a devout believer in Buddhism, and religious services needed to be held by the bereaved to enable the dead to go to the next life. Especially for young people, who hardly experienced any religious service, hearty performance of a memorial service by the bereaved was required. There is no doubt that Hikarugenji had never prayed deeply for Rokujomiyasudokoro. This is deeply connected with the tale of Rokujomiyasudokoro, who became a ghost. Memorial service and spiritual salvation seemed to be necessary to give repose to the souls of those who died in this tale. Murasakinoue could pass away peacefully because of her strong faith and the sincere service given by Hikarugenji. Next, about salvation for the ghosts who appeared in a dream, it is thought that Kirituboin could be saved and go to Paradise owing to the impressive memorial service held by Hikarugenji. It enabled an obvious process of the salvation of Fujitubo according to the wishes of Hikarugenji; even substituting himself for her. Hachinomiya got relieved and passed away because Nakanokimi preferred to live a happy life. In tales other than that of *Genji*, there is a conspicuous qualitative difference regarding the limited description which adheres closely only to developmental details in the tale, such as regarding how an individual prayed to Buddha for the fortune of the dead sincerely, and also the descriptions of the grand memorial services held directly. This demonstrates the power of those concerned, and shows episodes that could never have been mentioned in the *Tale of Genji*.

**Keywords:** Those who are possessed by ghost, Departed who appeared in one's dream, Reincarnation in Perfect bliss